アイドル達の現実(リアル)

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイドル達の現実（リアル）

【Ｎコード】
Ｎ５４３４Ｚ

【作者名】
ゲキガンガー

【あらすじ】
７６５プロが解散してから三年。
多くのアイドルが引退していく中、如月千早は、アイドルとしての活動を続けていた。
しかし、歌う事は叶わず、アイドルに対して絶望していくような毎日だった。
アイマスのアニメ版（まだ終わってないけど）のアフターストーリー。ｉｆストーリー。

残酷で救いのない話です。短編です。

（前書き）

バッドエンドなんで許してね。

『アイドル達の現実（リアル）』　作ゲキガンガー。

アイドルってなんだろう？

――私、如月千早は、その事について、最近はよく考えるようになった。

７６５プロが人気の絶頂を極めてから三年が経った。

「はい！　ＯＫです」

白い証明が照らされている中、カメラマンのＯＫがおりる。

私は服を身に着けていない。裸だった。

今日はヌード写真集の仕事があったのだ。

私だって、こんな仕事はしたくない。しかし、今の事務所のプロデューサー（７６５プロの時のプロデューサーとは違う。もっと下衆な男だ）は、歌の仕事を回す事を条件に、この仕事を私に飲ませた。

歌う事。歌い続ける事。

かつて死んだ弟に誓い、７６５プロの仲間達によって、取り戻した事。

それがアイドルとしての今の私を支える、最後の一枚岩になっている。

しかし、私は考えざるを得ない。

アイドルというのは、なんなんだろうか。一体、どういう存在なのだろう。

私はその日、仕事で秋葉原に向かった。私は、この場所が嫌いだった。欲望で薄汚れているような、この場所が。しかし、仕事という事では仕方がなかった。

私は、その写真集を、ファンの人達に手渡する仕事をしていた。
『いいよ。凄くいいよ。おじさん達の×××、美希のいやらしい×××に、沢山ちょうだい』
そんな時だった。いやらしい声が聞こえてきた。本来なら、耳を伏せてしまいたくなるような、生理的嫌悪を感じる声。
しかし、久しぶりに聞いた、その懐かしい声に、思わず画面を見入ってしまう。
見ると、大勢の男達の交わっている美希の姿があった。
美希は、白い液体をおいしそうに飲み干している。
気持ち悪かった。生理的に不快だ。
風の噂では聞いていた。美希は今ではアイドルではなく、ＡＶ女優になっているらしいという事を。
トップアイドルだった美希は、その知名度を利用し、ＡＶ女優としても人気を馳せている。
栄枯衰退。世の移り気は早かった。
７６５プロも、その例外には入らない。
人気のなくなった７６５プロは解散。竜宮小町も解散の流れになった。
メンバーも散り散りになっていった。
アイドルでなくなったメンバーも多い。
やよいは、弟達の学費の面倒を見る為、今は保母さんとして働いている。世話好きで、意外にしっかり者のやよいにはぴったりだろう。
真は今、執事喫茶の執事として働いている。本当はメイド服を着て接客していたいのに、と嘆いていた。久しぶりに会った時、そう言っていた。思わず真らしいと笑ってしまった。
我那覇さんは、実家の沖縄に帰った。今も動物達とは、仲よく暮らしているらしい。ただ、この前ペットのハム蔵が死んだと嘆いていた電話がきた。ハムスターの寿命は短い。残念だけど、仕方がなかった。亜美と真美は、小さかった事もあり、今では普通の学生生

活を送っている。伊織は、許嫁として決まっていた、どこかの財閥の御曹司と結婚。
雪歩はファンのストーカーに執拗な嫌がらせを受け、そのトラウマを引きずっている。
今は、精神病院で療養中だ。あずささんは、普通の会社員と知り合い、結婚。幸せそうな結婚写真が送られてきた。四条さんは、その全てが謎、今はどうしているかわからない。
律子さんはそのプロデュース能力を買われ、他の事務所に移籍。音無さんは相変わらず事務仕事をしているらしい。
春香とプロデューサーに関しては、連絡を取っていない。私が意図的に避けているというのが正しい。今の二人に私の姿を見せたくなかった。
家に帰った私は、弟と私の写真の横に飾った、皆との写真を見返す。
最後に共演したライブ、その後の集合写真だ。皆楽しそうで、この時がずっと続くと思っていた。
私も、ずっと続くと思っていた。
しかし、現実は私達が考えるよりも、ずっと過酷だった。

「プロデューサー！」
私は怒声をあげる。心底の怒りを込めて。
あの写真集以降も、歌の仕事は入ってこなかった。反面、似たような仕事ばかりが回ってきた。
「あ？　なんだ？」
今の私のプロデューサーはこいつだった。前のプロデューサーとは違う、下衆な男。しかし、そんな男でも、私がアイドルとして、歌い続けていく為には必要な男だった。
「約束が違います！　あの仕事が終わったら！　歌の仕事を回してくれるって！」
「あー。そんな事言ったかな。悪い悪い。今度はちゃんと歌の仕事

を回すように手配するよ」
頭をかきつつ、プロデューサーは誠意のない謝罪をする。
「お願いします……約束してください。私に、歌の仕事を回してくれるって」
私は泣きそうだった。実際に、涙を浮かべていたかもしれない。
「何でもしますから……その為なら何でも」
もう、涙が止められなくなってきた。
歌う事。
アイドルとしての最後の一枚岩。
自分が自分であるという事。
自己同一性。
その自己同一性を保つには、もう歌うしかなかった。
弟の為、仲間との絆を保つ為。
その為に歌う。
私はもう、歌う為に生きていると言っても過言ではなかった。
「そうか……何でもか」
プロデューサーは、にやりと笑った。
もう、私は歌わせて貰えるのなら、この男に身も心も売ってしまっていたのかもしれない。

――そんなある日の事だった。
街を出歩いていた私は、懐かしい顔に出くわす。
「あっ、千早ちゃん！」
「……春香」
3年前と変わらない、明るい声で駆け寄ってくる。3年経って、少し大人びた感じがするとはいえ、その明るい笑顔、表情は昔と何も変わっていなかった。
しかしとても顔を合わせづらかった。今にでも泣き出してしまいそうな自分がいたからだ。
「久しぶりだね。元気にしてた？」

「うん……元気」
精一杯の嘘で、明るく答えたつもりだった。けど、やはり不自然だった。
「今、ちょっと時間ある？」
「うん。大丈夫だけど」
元々、家に居ても気が滅入ってしまうので、散歩がてら外に出ただけだった。
「喫茶店でお茶でもしようよ。久しぶりに会ったんだしさ」
「……うん」

「けど、本当久しぶりだよね、千早ちゃん」
「うん……春香も、全然変わってないね」
私達は、出てきたコーヒーに口をつける。
「あちゃー、それは全然成長してないって意味かな？」
「そんな事はない。良い意味で変わってない。春香を見てると、昔の７６５プロを思い出すみたいで。……なんだか」
泣きそうになるのを堪える。
「ごめんなさい……こんな話をしちゃって」
今では、アイドルとして活躍しているメンバーは少ない。美希は、スキャンダルからのバッシングでＡＶ女優の道を歩まざるを得なかっただろうし、実質的には私一人である。今現在もアイドル活動を続けているのは。皆、別々の人生を歩んでいる。
「ううん……別にいいの」
「春香は、今どうしてるの？」
今まで、意図的に避けてた話題に触れる。今更、避ける事はできないだろう。現実を受け止めなければならなかった。
「……私は、その……今は、主婦、かな？　てへっ」
春香は可愛く舌を出す。
「へぇ、相手はどんな人？」
「……それは、その……千早ちゃんもよく知っている人だよ」

「……プロデューサー」
「ピンポーン、正解。なんちゃって。って、バレバレだったよね」
そうだった。765プロが解散する前、二人の様子は何だか変だった。その時、私はプロデューサーに蟠りのようなものを感じていて、その時はそれが何なのかはわからなかった。けど、二人の様子を見ていて、はっきりと気づいたのだ。私はプロデューサーを好きだったという事に。けど、それを気づくのが少々遅すぎたようだ。
「……その、指輪は？」
春香は薬指に、指輪をしていた。そんなに高いものではないだろう。
「結婚指輪なんだ。式はまだあげてないんだよ。それがプロデューサー、って、まだプロデューサーって呼んじゃってる、まいっか。プロデューサー、私と籍を入れる時に、『再就職が決まるまでは、結婚は絶対しない！』ってはりきっちゃって。それで、今は、普通の会社で、サラリーマンしてる。それが、御昼休みなんかで、同僚に自慢するらしくて『俺の嫁は元アイドルなんだぞ』って。それが私恥ずかしいからやめてって――いつも」
「……」
「ごめん。私一人で盛りあがちゃって」
「いいよ。春香が今幸せそうなら、私はそれで」
険悪な空気が走る。私のせいだろう。
「ねぇ……春香、聞きたい事があるの」
前々から、いつものように考えていた事。それを具体的に人に対して発するのは初めてだった。
「なに？　千早ちゃん」
「アイドルって……私達アイドルって、いったい何なのかな？」
「え？」
「人気のない時は頑張って働いて、人気が出ればちやほやされるけど、飽きたら使い捨てみたいに捨てられる。私達アイドルって、いったい何なのかな？　何のためにアイドルやってたのかな？」

涙がついには止まらなくなってきた。
「私達は、使い捨てられる為に、アイドルをやっていたっていうの？」
「千早ちゃん……」
「春香！　答えて！」
春香は少し間を置いて答える。
「アイドルっていうのは、ファンに夢を与える仕事。だけど、ファンに夢を与えただけ、現実を背負わなければならない仕事だと思うの。だから、私達が夢を与えただけ、現実が差し迫ってくる。だから、残酷な言い方だけど、仕方ない事なんだよ」
「……そう」
「ごめんね千早ちゃん。偉そうに言っちゃって。アイドルやめた人間の言う事じゃないね。千早ちゃんは、今でも立派にアイドルやってるもんね。私なんかより――」
「やめて……私は、そんな立派なアイドルじゃない」
春香との会話は、程なく終了した。

歌いたい。歌い続けなければならない。
その気持ちだけが、私をアイドル足らしめていた。
弟の死が、それを決定づけた。
歌いたい。
その気持ちを、より強くしてくれたのが、仲間との絆だった。
今、私を歌わせてくれていた弟はなくなり、仲間との絆はなくなった。
自宅に帰った私は、弟と昔の私が映っている写真を見る。
あんなに楽しそうに歌っていた私はもういない。
歌はもう、辛いだけのものになっていた。そして、その歌さえ日に日に歌えなくなっていった。
「ごめんね……お姉ちゃん、もう歌えないよ。ごめんね。本当にごめんね」

私は、その日一日、その写真を見ていた。

『本日の臨時ニュースです。元765プロのアイドル、如月千早さんが自宅で変死体として発見されました。如月千早さんは芸能活動に行き詰っており、それを苦に自殺したのだと予測されます。警察側も他殺などの可能性は低く、自殺として処理すると見られていました』

『いやー、しかし多いですねー。最近アイドルの自殺が』

『人気商売の光と影、と言ったところでしょうか。何にせよ、如月千早さんは未来のあるアイドルだっただけに悲しい限りです。それでは、次のニュースに移ります――次のニュースは』

――――――朝のニュースより。

FIN。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5434z/

アイドル達の現実(リアル)

2011年12月18日10時50分発行